

生涯教育研修活動報告書

病理検査研究班

実施日時：平成 29 年 7 月 20 日（木）19 時 00 分～21 時 00 分

会場：浦和コミュニティーセンター 第 13 集会室

点数：基礎教科—20 点

主題：肺癌コンパニオン診断に関する知識を深めよう

講演 1：IHC の精度管理と PD-L1 検査

講師：中川 加奈子（アジレント・テクノロジー株式会社
診断・ゲノミクス部門）

講演 2：抗 PD-1 抗体治療の実際～100 名の経験から～

講師：山口 央（埼玉医科大学国際医療センター 呼吸器内科）

司会：細沼 佑介（埼玉医科大学国際医療センター 病理診断部）

協賛： _____

参加人数： 会員 42 名，賛助会員 5 名，

出席した研究班班員：岡村卓哉，渡邊俊宏，森田繁，荻真里子，三鍋慎也，細沼佑介，
関口久男，高橋俊介，今村尚貴，金泉恵美子

研修内容の概要・感想など

近年、個別化医療をすすめていく上で治療薬の副作用軽減や患者の QOL 向上のためにも分子標的薬は必要不可欠となってきた。分子標的薬選択の可否を決定するためにコンパニオン診断が行われる。肺癌においてもニボルマブやペムブロリズマブが治療薬として承認され、これらの薬剤を選択するには PD-L1 の発現を確認しなければならない。今回の研修会では PD-L1 を中心にコンパニオン診断や治療薬の実際として実例を挙げて 2 人の講師にご講演いただいた。

講演 1 では、肺癌の分類、コンパニオン診断薬の定義、PD-L1 検査の実際と基本的な事項を講演していただいた。検査を行う上での注意点や固定時間など検体準備時の注意点などもわかりやすく解説していただいた。多くの施設では、検査センターへ検査委託されていることと思う。検体準備に今回の研修会での講演内容を生かしていただければと思う。

講演 2 では、ここ数年の肺癌予後の変化や治療方針を決定するための遺伝子変異の話、化学療法と分子標的薬の違い、また実際の治療症例も挙げてわかりやすく解説していただいた。PD-1 抗体薬の作用やその作用機序の影響で起こる副作用、その副作用に対する治療など検査技師ではなかなか知りえない情報を交えての講演であった。この講演では多職種連携が治療において重要であるとの話もあった。

癌治療において、治療を左右するコンパニオン診断は重要で、そこに関わる病理部門はその責任の重要性を認識する必要がある。今後も新たな分子標的薬の開発や適応拡大が考えられる。それに伴いコンパニオン診断も進められるため、これらの動向に注目していくことが重要だと思う。

平成 29 年 8 月 17 日

文責：金泉 恵美子